
穏やかなる日曜日

すずくれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

穏やかなる日曜日

【Nコード】

N7714F

【作者名】

すずくれ

【あらすじ】

姉と妹の日曜日。姉妹の何気ない日常のワンシーンです。

自由を約束された日曜日。

適当な温度を保ち、高いレベルで心地よさを提供しているベッドに包まれている私を、日中最高高度になったであろう太陽から発せられる光線が起こす。

片目を開いた私。正面にあるブラインドの隙間から太陽光線が燦々^{さん}と降り注いでいる。朝とは違う明るさや室温が心地よい。目覚ましなんかで起こされるよりも、今日みたいに自然と起きるほうが気分もいい。毎週毎週、時間に縛られることなく起きたい時に起きれるこのひと時のためにがんばっているのかもしれない、と思えるほどだ。流石は人類の英知を集結した欲望解消空間だ。ニコチンも裸で逃げ出すほど私は依存している。

携帯電話に届いていた数件のメールマガジンを機械的に既読にしたところで、両目が昼の明るさに慣れ、長年連れ添ってきた私の胃が空腹を訴えてきた。

眠気の薄れてきた今の私には食欲に対抗できる力はあらず、胃の訴えるままにベッドを出た。12月の半ばだけあつてなかなか寒い。あまりにも寒いのでベッドに戻りたいという気持ちが芽生えたが食欲はそれを許さず、私は食欲に背中を押されるままりビングへ向かった。

「おっはよ……？」

食料と暖を求めてリビングへ足を踏み入れると、かのロダン作品である地獄の門に引っ付いている有名なアレを連想させる体勢を維持している妹がいた。

妹はソファーに重々しく腰をかけ、右腕の肘を膝に付け、手を顎に当てているその姿は、正に実写版考える人だ。その実写版考える人は左手に持ったスプーンを正面に掲げ、ジッと睨んでいる。

「何をしてるの？」

悟りの境地に達したんじゃないかと思うくらい石像らしい妹。座禅を組むお坊さんがきつと見とれるくらい、静かに整理された空気が妹の周りに漂っていた。

「エスパーになるための訓練」

姿勢はそのまま妹様は仰った。

「へー、邪魔してすみませんでしたー。どうかこの調子で頑張ってくださいましー。と、ささっと妹の奇行に対応できれば、私はフイクションで繰り広げられる非日常の変化に順応する主人公のような人間になれるかもしれない。」

薄いピンクの生地に赤や濃いピンクの水玉模様が乗ったパジャマで、散々私に自慢してきたフェザーボブという外ハネパーマのかかったショートヘヤーが、寝起きらしくぼさぼさになった状態の妹。妹というステレオタイプの如く、小柄でぱつと見おとなしそうな少女が、考える人の姿勢よろしくスプーンとにらめっこしている光景はなかなか乙なものだろう。

寝起きで頭が働いていないのか、本能が厄介事に首を突っ込むなと言っているのか知らないが、私はいつもグータラしている妹が真面目に物事へ取り組んでいるのだから応援することにした。

「なんてことしてるの！ そんなバカなことやって！ 超能力なんて存在するわけじゃないじゃない！ とか言って妹をこちらの世界に引き戻すとか、馬鹿じゃないの？ とか言って妹に宣戦布告するのがめんどくさかっただけであって、決して妹を思っただけの事ではない。ノーリアクションを貫くという大人の対応ができない私が、1番安全なちょっかいの出し方を寝起きの頭でボケーッと考えた結果、応援するという結論を導き出したただけなのだ。」

「がんばれ、我が妹よ」

応援といっても声援を送る程度だ。

「言われるまでも無いわ」

若干ツンツンしているが、スプーンに向けた意識が私に向くことはなかった。セーフ。

そろそろクーデターでも起こすのではないかというくらいお腹がすいてきたので、食料を漁るべくキッチンへ向かった。

我が家はダイニングキッチンなので、ここでちょうど出ていた食パンをトーストで食らう準備をしながら超能力養成訓練に励む妹の顔と向かい合う事が出来る。

「うん」

音源の沈黙しているリビングに、妹のうなり声とトースターの音が響く。妹は眉間にしわを寄せ、必死そうにスプーンを見つめている。あの飽きっぽい妹のことだ。すぐに投げ出すだろう。

「うん……」

妹の大きな瞳が顔の中央に寄った。つまり、寄り目だ。

あの顔ならにらめっこは百戦百勝だろう。妹を知る男子が今の状態の妹を見たら、きつと失望する。それくらいすごい顔だ。手元にカメラ、もしくはそれに準じる何かが無いのが非常に惜しい。

「うううん……」

顔がプルプル震え始めた。相当頭に血が上っているようだ。陶器と絹を足して2で割らない様な白さの肌が、みるみるうちに赤くなっていく。

しかし、スプーンに仕掛けも無しでユリ・ゲラーの様にクネクネと曲げれると本気で思っているのだろうか。思っていたならそれはそれでおめでたい話だが、流石にそこまで妹の頭は春が跋扈はつこしていいのだらうか。

「ッ!？」

チーン。

トースターが役目を終えた音が鳴り響くと同時に、薄紅色に染まっていた妹の顔から、黒々とした赤い液体が飛び出した。

「は、鼻血出た……」

こちらからは詳しい状況はわからないが、結構勢い良く飛び出た黒々とした赤い液体をはっきりと見た。さらに妹の目の前にあるテーブルにも赤い液体が飛び散った事が確認できる。

スプーンを放り投げ、ティッシュ箱をむしる妹。大きな目がさらに開いていて、平常時よりも切迫した心理状態にあるように見える。……実に面白い。

「パジャマに血が付いたー！ もおヤダー！」

鼻にティッシュを詰め、血が付着したであろう箇所をティッシュでふき取っている。

私はそんな一人で楽しんでいる妹を隅に、冷蔵庫から取り出したマーガリンを出来立てホヤホヤのトーストに塗りたくりかぶりついた。

そんな穏やかなる日曜日。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7714f/>

穏やかなる日曜日

2010年10月8日15時20分発行